

子供のいる住宅の生活実態調査

ミサワホーム株式会社

1. プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、少子高齢化に伴う住宅の新たな形態として、近年、普及が進んでいる二世帯住宅のキッズデザインに関するデータを整備すること、また、子どものお手伝いと傷害や親の考えの関係を明らかにすることを目的として、以下の調査研究を行った。1) 二世帯住宅の生活不具合 MAP を作成し、単世帯との比較分析を実施、2) 子供の年齢・間取り・親の意向（傷害リスクに対する意向など）と、子供のお手伝いとの因果関係を調査。

また、これまで蓄積してきた生活不具合データを簡便に検索可能にするソフトウェアの開発を行った。

2. 実施方法

2-1) お宅訪問調査（15件）

- ・ モニターの自宅を訪問し、「リアルな暮らしの実態」を見ながら、1対1の対話方式で調査



図1：住宅訪問による場所とひやり・はっとの聞き取り調査の例

2-2) WEBアンケート調査

- ・ お手伝いについての考え方や進め方の傾向を把握するためのアンケート（25問×200件）
- ・ 二世帯住宅（完全分離・完全共有を除く）の居住スペースの仕様や使い方についてのアンケート（20問×100件）

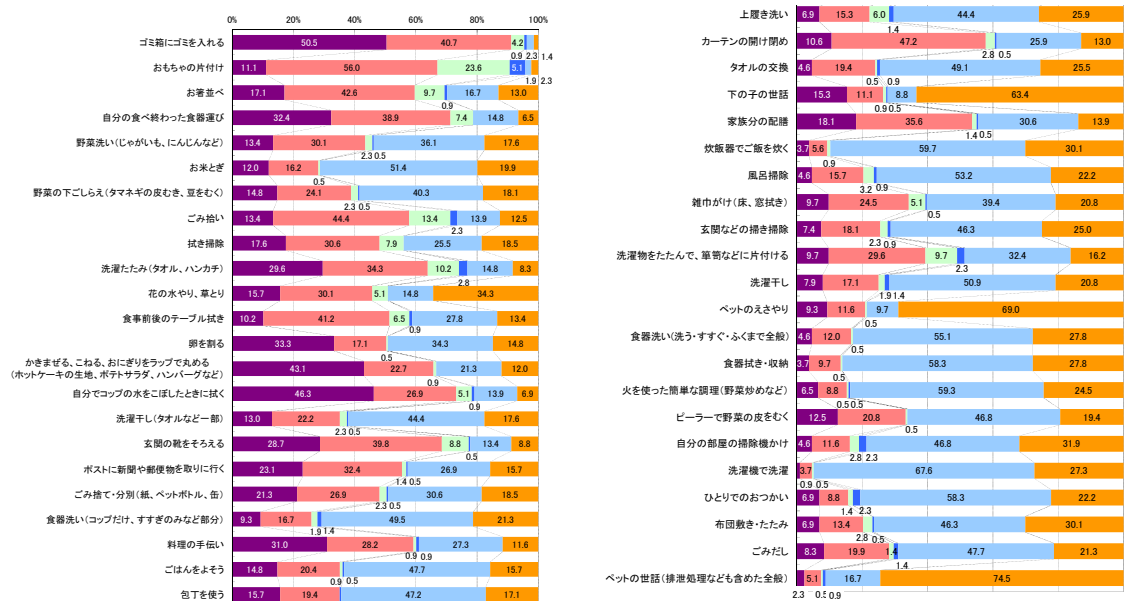


図2：子どものお手伝いの実態調査の解析例 (N=216)

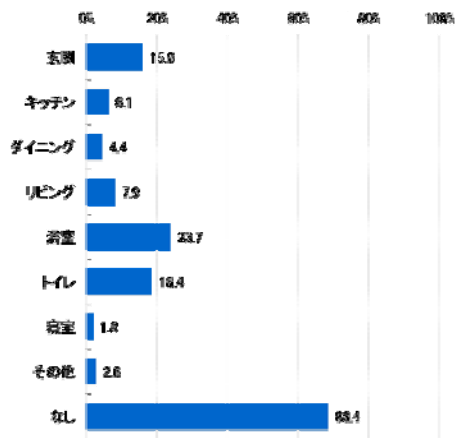


図3：ユニバーサルデザインの取り入れ率とその具体例

	内容	年齢	都道府県	職業
玄関	玄関に上り降りする際に楽なように手すりがついている	34	岐阜県	専業主婦(主夫)
	玄関の横幅が5メートル以上あり、車いすでも楽に入出りできる	35	佐賀県	自由業
	つかまる棒	40	福島県	専業主婦(主夫)
	開けやすいように、開き戸になっている	39	兵庫県	会社員(その他)
	壁面に手すり→玄関に上り降りする際に楽なように手すりがついている	34	岐阜県	専業主婦(主夫)
	引き戸になっている→ドアの開け閉めがしやすい	42	愛知県	パート・アルバイト
	ドア、下駄箱→取っ手を軽く押すだけでドアが開くので、子供でも開けやすい	37	兵庫県	専業主婦(主夫)
	玄関の内と外の高さが一緒→玄関のドアに段差がない	32	滋賀県	専業主婦(主夫)
キッチン	壁面に手すり→入口から手すりを伝って歩け、かまちに上がりやすいようにした	39	静岡県	専業主婦(主夫)
	カウンターキッチン→リビングでもダイニングでもお互いのようすがわかる。IHなので火事の心配もない	42	徳島県	専業主婦(主夫)
	床が滑りにくく、段差がない	40	福岡県	専業主婦(主夫)
ダイニング	床に段差がないのでつまづきにくい	44	埼玉県	専業主婦(主夫)
	部屋に段差が全くないので転んだりもないので安心	40	宮崎県	その他
	段差がない。無垢板でやわらかい	40	福岡県	専業主婦(主夫)
リビング	リビングに窓が5つあるので明るい	35	福岡県	パート・アルバイト
	段差をなくした	39	東京都	会社員(事務系)
	部屋に段差が全くないので転んだりもないので安心	40	宮崎県	その他
	引き戸、無垢板の床で段差がない	40	福岡県	専業主婦(主夫)

2-3) 不具合データ検索システムの開発

間取り情報をグラフ構造データとして保存することで、類似した間取りが検索できる機能を開発した。実際に、調査した住宅の情報を入力することで、検索可能であることを確認した。



図4：開発したシステム

3. 結果と考察

2-1)、2-2)の調査により、判明した点の例を挙げる。1) 2階リビングからの転落(ヒヤリハット)、玄関の収納不足等の二世帯住宅ならではの生活不具合が存在している。2) 子供は、概ね2歳から簡単なお手伝いを始め、8歳までには簡単な家事を行う能力は備わっていると考えられる。3) 「自分でやった方が早い」、「ケガをさせたくない」等の親の意向が、子供がお手伝いをしない大きな要因となっている。例えば、できるのに、「しない・やらせない」お手伝いは「テーブル拭き」や「拭き掃除」「玄関等の掃き掃除」。逆にできるならやらせているのは「下の子の世話」「火を使った料理」「ペットのえさやり」等があった。「ひとりでのおつかい」「火を使った料理」「ピーラーでの皮むき」は危険だからさせないという理由が多い。「食器拭き・収納」「洗濯機で洗濯」は他に比べて自分の仕事だからさせないという理由が多い。4) ユニバーサルデザイン(キッズデザイン)の取り組みに関しては、玄関は手すりや段差の工夫、開き戸等が採用されている。浴室も手すりの他浅い浴槽滑りにくい床等、トイレは手すり・自動洗浄等が多く採用されている。LDKは床の段差解消等のみで目立った取り入れは少なかった。

2-3)の不具合データ検索システムに関しては、住宅メーカー、家電メーカー、什器メーカーなどからのニーズがあることが分かった。また、今回は子どもを中心としたひやりはっとや事故データであったが、同様なニーズが高齢者・障害者の福祉分野にあることも判明した。今回、開発した技術は高齢者・障害者の福祉分野のデータに関しても適用可能な技術であり、今後、キッズデザインのみならず、他のデザイン分野への展開の可能性が確認された。

4. まとめ・今後の展望

今回の調査により、近年、普及の進んでいる二世帯住宅におけるひやりはっと・事故のデータ

が拡充された。昨年度まで行ってきた単世帯住宅と比較すると、二世帯住宅特有の生活不具合が存在していた（例、特に2Fリビングからの転落など）。少子高齢化に伴い、子ども・高齢者が共存する住宅環境という新たなデザインニーズがあることが明らかとなった。従来のシニア向け住宅へのキッズデザインの普及、また、キッズデザインを考慮した住宅に対して、さらに、高齢者への配慮を行うなどの方向性が重要であり、今回、その参考となる基本データが整備された。また、お手伝い実態に対する調査に関しては、現在行われているお手伝いの種類や、その場所、各お手伝いのリスクに関する親の考え方を整理した。また、お手伝い促進のためのキッズデザインという観点から、そのニーズの高い製品群が整理された。これまで蓄積してきた生活不具合データを検索可能にする技術を開発した。今後、これを住宅メーカー、家電メーカー、什器メーカーなどに提供することで、日常生活空間の不具合を手早く確認するなどの情報提供サービスへの展開が可能である。また、同様なニーズが高齢者・障害者の福祉分野にあり、今後、キッズデザインのみならず、他のデザイン分野への展開を図っていく。